

早田 睦 (東京都港区)

タイトル「私が貴方にできる事」

四十人が押し込められた教室でたまたま席が隣になった、あの子やその子と同じように。この私にもまた、今属している場所の他で知り合った友達がいる。一緒に過ごしていた仲間がいる。小規模な小学校と中学校に通っていたためその人数は少ないと言えるのかも知れないが、代わりに皆が皆、強烈といえる個性を持ち合わせていた。

中学校一年生の終わりに出合ったとある友人は、当時からとても大人びていた。これはきっと容姿だけの問題ではなくて、周囲への対応の仕方や身に纏う雰囲気こそがそう印象付けたのだと思う。誰より強い意思を持ち合わせているのに、決して意固地にはならない人。完璧すぎる人間とはまた種類が違うから、出来が良くても嫌味は無い。そうして私をも捉えたのは、他人を惹きつける何かしらの魅力。突然現れた彼女という存在は、少なからず私に衝撃を与えた。押し隠していた筈の子供じみた愚かさを指摘されて、それと同時に許容されてしまったような、とても不思議な感覚がしたのだ。

それから始まった日々は余りにも充実して。時折忘れそうになるが、私達が互いに近い場所にいた時間はほんの数ヶ月間にすぎない。なぜなら、彼女が今度は突然いなくなってしまったから。転校してしまったから。

後になって考えてみると、彼女はよく微笑んでいた。辛そうな顔をしながらも。笑っていた。涙を流したその時も。

本当は、苦しんでいる事ぐらい何となく気がついていたのに。訊ねるべきではないと、興味本位で問いただしてはいけないと、臆病な誰かが私の中で叫んで。いつだって自分のためにしか働かない思考は、例外なくあの時も私を押し黙らせた。しばらく経ってから再会した時だってそうだ。楽しかった出来事も愚痴交じりの話も全て笑顔でする彼女は相変わらずで。同様に相変わらずの私は、「無理をするな」なんていう台詞はどうしても出す事ができなかった。彼女の決意を揺るがしてしまうのは、何だか忍びない気がしていたから。後悔すると知っていながら、ただ黙って隣にいる事以外に何も出来なかった。

貴方が私のそれであつたように。私もまた、貴方の力になれていたのだろうか。いつの日か、面と向かって貴方にそれを問える私になれるように。もっと確かな支えになれるように。私はもう少し、頑張ってみようと思う。